

もぎ そうべえ

茂木 惣兵衛・初代 (1827-1894)

原善三郎と並び、横浜生糸貿易界の双壁。襲名は三代にわたる。

◆生年：文政10年10月（1827）上野国群馬郡高崎にて、質商大黒屋茂木惣七の長男として生まれる。

◆神奈川との関わり：安政6年（1859）頃横浜の雑貨商野沢屋に生糸売込担当として勤める。野沢屋の業務を続けつつ、万延元年（1860）に生糸・水油・昆布・茶・荒物をあきなう石川屋平右衛門の店を養子として相続。文久元年（1861）野沢屋主人が病死すると、野沢屋の暖簾を譲り受け、石川屋を野沢屋とあらためて独立。横浜を代表する生糸売込商となる。明治16年（1883年）に甥の保次郎を養嗣子にむかえた後、正確な時期は不明だが家督を保次郎に譲ってこれを2代目惣兵衛とし、自らは保平と改称した。

慶応3年（1867）横浜荷物為替組合の筆頭を務めた。明治6年（1873）に横浜生糸改会社が設立されると、原善三郎他と共に社長に就任。

明治2年（1869）横浜為替会社の設立時には、原善三郎らと共に主要株主の一人となる。同社が明治7年（1874）に改組して第二国立銀行となった際には、副頭取に就任。また、明治11年（1878）大谷嘉兵衛らと第七十四国立銀行を設立、第2代頭取に就任した。

◆没年：明治27年（1894）8月21日、66歳。墓所は横浜市相沢墓地。

もっと知りたい人のために…

「第1章創業 創業者茂木惣兵衛のこと」『野沢屋から横浜松坂屋へのあゆみ』ノザワ松坂屋編 有隣堂（印刷）[1977] p6-18 〈Yかな〉

当時の様子がよくわかる図や写真が豊富。

「茂木惣兵衛〈横浜最大の生糸売込商〉」平野正裕著 『横浜商人とその時代』横浜開港資料館編 有隣堂 1994 p45-80 〈Yかな、K〉

明治・大正期の横浜商人の実像と、彼らを取り巻く状況を、様々な角度から描き

はら ぜんざぶろう

原 善三郎 (1827-1899)

「眼力確かな」横浜第一の生糸貿易商にして、県会議員、横浜市会初代議長など、多くの肩書を身にまとった「亀善」。

- ◆生年：文政10年（1827）武蔵国児玉郡渡瀬村（現・埼玉県児玉郡神川町渡瀬）の農業を営む傍ら繭や生糸の取引を行う家に生まれる。
- ◆神奈川との関わり：文久元年（1861）に荷主として上州などで買い付けた生糸を横浜の野沢庄三郎や吉村幸兵衛に出荷していたが、文久2年（1862）には横浜本町3丁目に商号「亀屋」と付けた店を開き、地方製糸家や生糸商が居留外国商人に生糸を売り込む際の仲介人となり、やがて委託販売人となっていく。

明治5年（1872）9月12日の新橋－横浜間鉄道開業式で祝詞を奉る。明治6年（1873）横浜の生糸売込商33名によって設立された「横浜生糸改会社」の社長の一人に名を連ねるも、外交問題を孕む生糸貿易には苦労を重ねた。明治7年（1874）には横浜為替会社を改組した第二国立銀行★頭取に就任。明治12年（1879）県会議員に選出され、明治13年（1880）横浜商法会議所を設立しその頭取に就任した。明治22年（1889）には、市制が施行された横浜の市議会議員、そして初代市議会議長に選出される。

☆第二国立銀行…全国8ヵ所のうちの一つとして設立された横浜為替銀行は、株主の約90%を横浜商人（原善三郎、茂木惣兵衛ら）が占めて経営の実権を握り、洋銀券を含む発券業務などを行っていた。明治5年（1872）国立銀行条例制定に際し、原・茂木ら6人は国立銀行への改組を願い出、翌6年に許可、明治7年（1874）8月に第二国立銀行として開業した。

仕事を離れれば、明治20年頃現在の三溪園の地に松風閣と命名される山荘を築いた。三溪園は孫娘婿の富太郎によって完成される。

- ◆没年：明治32年（1899）2月6日、数え73歳にして没。墓所は横浜市久保山墓地。

もっと知りたい人のために…

『横濱どんたく 下巻』石井光太郎・東海林静男編 有隣堂 1973
〈Y、Yかな〉

「横浜貿易新報」に連載された「開港側面史」を集録補訂したものだが、付録として約100頁におよぶ「原善三郎伝」を収録。

『〈生糸商〉原善三郎と富太郎（三溪）—その生涯と事績—』勝浦吉雄著 文化書房博文社 1996 〈Yかな、K〉

人名辞典や列伝、開港資料に名を出すものの、まとまった伝記としては初となる本書。

たかしま か え も ん

高島 嘉右衛門（1832—1914）

伊藤博文、陸奥宗光ら政府高官とつながり、ガス灯設置、鉄道事業用地の埋め立てなど、開港地・横浜のインフラ整備で財を成す。

- ◆生年：天保3年（1832）江戸三十間堀町（現・中央区銀座）の材木商兼建築請負業・遠州屋（薬師寺）嘉兵衛の長男に生まれる。
- ◆神奈川との関わり：19歳で家業を継ぐ。安政6年（1859）外国人客を当て込み横浜・本町に物産店「肥前屋」を開業したが、翌年、金貨密売★の罪により入牢。慶応元年（1865）赦免、江戸払いとなったため、横浜で材木商兼建築請負業を始める。高島嘉右衛門と改名。

☆金貨密売…当時の金と銀の交換比率は、日本が1対5に対し国際的には1対15であったので、外国人に金を売って銀を買うと差額で儲かる仕組みになっていた。金貨を外国人に渡すことは安政6年に禁止になったが、これを組織的に行ったため、高島は罪を問われた。

明治2年（1869）横浜・尾上町に新政府の高官や外国人を相手と

する旅館「高島屋」を開業、伊藤博文らとの付き合いがはじまる。翌年より、ガス会社設立の権利を得て横浜・関内にガス灯を設置したり、下水道を整備したり、鉄道事業のため横浜・石崎から神奈川・青木町を埋め立て「高島町」と命名し遊郭を誘致するなど、様々な事業を手掛けて財を成す。しかし、日本近代海運業の先駆けとなる横浜―函館間定期航路は、開通するも採算が取れず2年で中止。また、横浜・伊勢山下に創設した「高島学校」（洋学科・漢学科）は、その功により明治天皇から銀杯を賜ったが経営難で2年後には神奈川県に無償譲渡（のち焼失・廃校）と、うまくいかない事業もなかにはあった。明治9年（1876）実業界を引退し大綱山荘（現・横浜市神奈川区高島台）に隠棲。その後も政財界各方面で活躍した。

獄中から始めた易の研究により「易豪」などとも呼ばれ、高島呑象名で『高島易断』（1886初版、何度か増補）を著している。

◆没年：大正3年（1914）82歳。墓所は東京高輪・泉岳寺。

もっと知りたい人のために…

『呑象高嶋嘉右衛門翁伝』本多良恭編 東西出版社 1914 〈Yかな、K〉

『高島嘉右衛門自叙伝』石渡道助編 実業之横浜社 1917 〈Yかな〉

『高島易断を創った男』持田鋼一郎著 新潮社 2003 〈Yかな〉

上2冊は旧字体で読みにくいガリアルタイムのもの。読みやすさをとるなら3冊目。

たなか へいはち

田中 平八（1834―1884）

「天下の糸平」の異名を持つ、開港地の肝っ玉相場師。生糸売込と洋銀相場で財を成す。

◆生年：天保5年（1834）信濃国上伊那郡赤穂村（現・長野県駒ケ根市赤穂）の雑貨商の家に生まれる。

◆神奈川との関わり：元治元年（1864）に横浜で外国人相手に商売をするも失敗。慶応2年（1866）再び横浜に来て生糸商（洋銀商＝両替商とする説もある）大和屋三郎兵衛に見出され、生糸の売り込みと洋銀相場で巨利を博し、横浜南仲通2丁目（4丁目とも）に屋号「糸屋」を開業。「天下の糸平」と呼ばれた。

明治元年（1868）横浜の両替商の合議により、南仲通の平八所有の家屋を集会所とし、「洋銀相場会所」を併置して洋銀相場（ドル相場）取引を開始、頭取に就任した。明治2年（1869）横浜為替会社が設立されると貸付掛となった。明治4年（1871）には横浜に生糸会社を創立した。

同年3月に起工した横浜の水道建設は民間有志18名の共同事業であったが、ここにも平八の名前が見て取れる。明治5年（1872）9月12日に行われた新橋－横浜間鉄道開業式には、天皇を迎える横浜側の代表5人の1人に選ばれ、明治10年（1877）には第一大区★議員に選出された。なお、平八が出資した富貴楼は、時の政治家や政商等が盛んに入りし、料亭政治の舞台として繁盛した。

☆第一大区…「大区」は当時の行政区分。神奈川全県下が23の大区に分かれ、各大区はさらに、いくつかの小区に分かれる。第一大区の区画は現在の横浜市西区、中区、南区など。

◆没年：明治17年（1884）6月8日、50歳。墓所は横浜市神奈川区・良泉寺。

もっと知りたい人のために…

『横濱開港五十年史 下巻』横浜商業会議所編 名著出版 1973 〈Yかな〉
巻末附録「横濱の功労者」に項目あり。

『田中平八の生涯』宮下慶正著 建碑期成会 1985 〈Yかな、K〉
「天下の糸平生誕百五十年記念」の副題あり。

は や し ゆうてき

早矢仕 有的 (1837-1901)

福沢諭吉の勧めにより、西洋書籍を主として薬品等を扱う貿易業・丸善を始めた医者。明治前期の開港地・横浜の著名人の一人。

- ◆生年：天保8年（1837）美濃国武儀郡^{むぎ}笹賀村（現・岐阜県^{やまがた}山県市）の生まれ。誕生前に医師であった父を亡くし、早矢仕家の養子となる。
- ◆神奈川との関わり：故郷で医者をしていたが、勧められて安政6年（1859）江戸に出る。医師として開業するなかで横浜に触れて英学を志し、慶応3年（1867）慶應義塾に入塾。翌年横浜に転居、^{ばいどく}黴毒病院★勤務と自宅診療の傍ら、福沢諭吉の勧めで明治元年（1868）11月（公称は明治2年1月）横浜・新浜町（現・中区尾上町）に西洋書籍を主として薬品や雑貨を扱う「丸屋善八（略して丸善）」を開業した。一年たらずで手狭になり、移転した先の横浜・相生町では、店を3つに区切り書店・薬店・診療所としたという。明治8年（1875）には本店を東京に移すが、その後も横浜区から県会議員に当選するなど横浜との関係は深く、明治42年（1911）の横浜市・開港五十年祭では「横浜市の繁栄に貢献した六大偉人」の一人に選ばれた。

☆黴毒病院…駐留イギリス軍の強い要望で、新政府により横浜・姿見町（現・中区末広町・羽衣町）に設けられた娼妓の検疫施設。黴毒は梅毒とも書き、性感染症の一種。

丸屋は多彩な事業を展開したが、不況により明治17年（1884）丸家銀行が破綻。有的は責任を取り一切の事業から手を引いた。

- ◆没年：明治34年（1901）愛知県津具にて発病、客死。64歳だった。墓所は東京・雑司ヶ谷霊園。

もっと知りたい人のために…

残念ながら有的には、現在のところ簡単に入手できるようなまとまった伝記・評伝がない。

『丸善百年史 上巻』 丸善 1980 (Y、Yかな、K)

「波風高し、文化の先駆 早矢仕有的」 『幕末明治傑物伝』 紀田
順一郎著 平凡社 2010 (Yかな)

コラム 神奈川の別荘地と実業家〈前編〉

今回取り上げた実業家の中では何人くらいの人が、神奈川県内に別荘を所有していたのだろう。たとえば、別荘建築の見学ガイドのために作成した資料を見ることのできるホームページ（神奈川県建築士事務所協会作成）がある。このなかに「葉山町別荘名士名鑑」というリストがあり、明治期から大正、昭和まで葉山に別荘を持ったことのある皇族、政治家、実業家、芸術家などの有名な人々が140名ほどあげられている。慶應義塾の創始者福沢諭吉、箏曲家宮城道雄、日本画の伊東深水の名前も見える。「社史と伝記に見る日本の実業家」本編でとりあげた人物のうちでは、浅野総一郎、郷誠之助、鈴木三郎助、大谷竹次郎、鮎川義介、石橋正二郎の6人が載っている。他にも石坂泰三（東芝ほか）、服部金太郎（精工舎）、志田文夫（日本電気）、山崎種二（山種証券）など、かなりの人数が掲載されている。

葉山は明治27年（1895）に御用邸が完成してから別荘ブームが訪れたようだが、神奈川県全体で見ると、明治20年ころから海沿いの地域、とくに相模湾岸に別荘が建ち並び始めた。もともと風光明媚なこの地域は、中国・湘江の南の景勝地「湘南」に見立てられ、相模の南ということもあって「湘南」と呼ばれるようになっていたのだが、別荘地として注目されたのは、この時代に健康法としての海水浴が喧伝されたことが大きかった。それと相まって、明治20年（1888）の東海道線国府津駅開業、明治22年（1890）の横須賀線横須賀駅開業と鉄道の開通が続いたことで、東京からの時間が短縮されたことも重要な要素となった。

やすだ ぜんじろう

安田 善次郎 (1838-1921)

三井、三菱、住友と並ぶ旧四大財閥、安田財閥の創始者。両替商から銀行業に進出、社会事業にも貢献した。別邸のある大磯を愛した。

- ◆生年：天保9年（1838）越中国婦負郡富山町の一角、鍋屋小路に生まれる。安田家は代々農民だったが、父が下士の株を買って藩士身分となった。
- ◆神奈川との関わり：維新後の太政官札取引で巨利を博したことは、よく知られているが、ほぼ同時期に、横浜で外国商館との古金銀取引でも利益をあげた。第三国立銀行、安田銀行の設立、日本銀行の理事就任など銀行家としての地位確立の後、数多くの事業出資や企業経営にも乗り出した。横浜市電の前身である横浜電気鉄道の顧問就任、今日の京浜急行につながる京浜電気鉄道への融資などがある。同じ富山出身の浅野総一郎の事業展開を高く評価し、東京湾の埋立事業（後の京浜工業地帯）実現に大きな役割を果たした。大正2年（1913）浅野から王城山（大磯）にある別荘を譲り受け、邸内に新たに別荘を建て「寿楽庵」と名付けた。現在、安田不動産大磯寮となっている。また、横須賀市安浦町の「安」は、当地の埋立工事を実施した安田保善社（安田財閥の中核企業）の名にちなむ。
- ◆没年：大正10年（1921）当別荘で、平民青年党を組織するなどした朝日平吾により、労働ホテル建設寄付の申し出をされ、断ったところ刺殺される。82歳。墓所は東京都文京区・護国寺ほか。

もっと知りたい人のために…

『富之礎』安田善次郎著 宮城伊兵衛 1911 〈K〉

『安田善次郎傳』矢野文雄著 安田保善社 1925 〈Yかな〉

『安田善次郎』由井常彦著 ミネルヴァ書房 2010 〈Y〉

1 番目は本人口述による自伝。2 番目は正伝。3 番目は経営史的観点から描いた伝記。

大谷 嘉兵衛 (1844-1933)

日本の茶業界、横浜の財界や教育界など多方面に活躍する実業家「茶嘉兵衛」。「大谷の鼻、原の眼」と並び称された。

- ◆生年：弘化元年12月22日（1844）伊勢国飯高郡谷野村に、農家吉兵衛の四男として生まれる。
- ◆神奈川との関わり：文久2年（1862）横浜に出て、生糸・蚕種・茶を扱う伊勢屋小倉藤兵衛の店で製茶貿易に従事する。慶応3年（1867）横浜のスミス＝ベーカー商会に製茶買入方として雇われた。慶応4年5月（1868）、製茶売込店を横浜に開く。明治5年（1872）製茶改良会社を設立。明治28年（1895）横浜商業会議所の設立発起人に加わり、2度にわたり横浜商業会議所会頭に就任した。

また、明治11年（1878）茂木惣兵衛らと共に、第七十四国立銀行を設立、後に頭取を務めた。明治15年（1882）横浜商法学校の設立発起人となる。

県政、市政でも活躍。神奈川県会議員（明治23～32年）、神奈川県市部会議長（明治25～32年）。大正9年（1920）から神奈川県教育会長を18年間務めた。また、横浜市会議員（明治22～26年）、横浜市会議長（明治23～26年）。明治26年（1893）以降横浜市教育会長を30年間務め、教育の発展にも尽力した。その後明治36年（1903）には横浜水道局長に就任し、横浜市の水道拡張に尽力した。

- ◆没年：昭和8年（1933）2月、享年88歳。墓所は横浜市天徳寺。

もっと知りたい人のために…

『大谷嘉兵衛翁傳』 大谷嘉兵衛翁頌徳會編 大谷嘉兵衛翁頌徳會
1931 〈Y、Yかな、K〉

昭和6年（1931）までの内容。年譜の掲載あり。

「大谷嘉兵衛〈商館勤めを経験した製茶貿易商〉」吉良芳恵著

『横浜商人とその時代』横浜開港資料館編 有隣堂 1994

p167-197 〈Yかな、K〉

明治・大正期の横浜商人の実像と、彼らを取り巻く状況を、様々な角度から描き出した評伝。

あめみや (あめのみや) けいじろう

雨宮 敬次郎 (1846-1911)

生糸相場、洋銀相場、製粉工場の起業、開発事業など様々な事業において活躍。「天下の雨敬」、「投機界の魔王」の通称がある。

- ◆生年：弘化3年9月5日(1846)、甲斐国山梨郡牛奥村(現・山梨県甲州市)の名主の家に生まれる。
- ◆神奈川との関わり：慶応元年(1865)頃、種紙(蚕卵紙)を仕入れて横浜に売りに出たが1枚も売れず無一文になる。一度郷里に引き上げるが、質屋を開業しながら種紙と生糸の相場をはじめ、借金を返済する。明治5年(1872)に再度横浜へ出て生糸売込み、洋銀相場などに携わる。この頃から田中平八と親交があった。

また、全国の鉄道に関わる経歴から「鉄道王」とも呼ばれ、神奈川県内の鉄道にも関わりをもつ。雨宮は療養のため小田原から熱海まで人力車に乗って行き、交通が不便な町であることを実感。熱海の有力者達の要請を受けて、明治27～28年(1894～1895)小田原-熱海間に豆相人車鉄道(後の熱海鉄道)を敷設した。人車鉄道とは文字通り、人が客車を押して動かす鉄道である。他には、明治37年(1904)京浜電気鉄道株式会社(現在の京浜急行電鉄株式会社)社長、明治39年(1906)から明治44年(1911)1月まで江ノ島電気鉄道株式会社(現在の江ノ島電鉄株式会社)社長に就任している。

- ◆没年：明治44年(1911)1月20日、64歳。

もっと知りたい人のために…

『過去六十年事蹟』雨宮敬次郎著 櫻内幸雄 1907 〈Yかな〉

「自邸の庭に富士山 相場師雨宮敬次郎」『幕末明治傑物伝』紀田
順一郎著 平凡社 2010 p270-285 〈Yかな〉

1 番目は明治39年（1906）までの内容の自伝。読みやすさをとるなら2 番目。

コラム 神奈川の別荘地と実業家〈後編〉

明治38年（1905）以降、日露戦争後の好景気で実業家も別荘を持つようになり、湘南地方は東京近郊で最大の別荘地になっていった。なかでも大磯、鎌倉、葉山の別荘数は、明治40年（1907）の大磯で約150戸、明治45年（1912）の鎌倉で約400戸、大正2年（1913）の葉山で約100戸あったというから、まさしく「別荘が建ち並ぶ」という表現がふさわしい。このほか藤沢鵜沼は、明治27年（1895）から大給子^{おぎょう}爵家が売りに出した本邦初の分譲別荘地だった。

こうして明治20年代から大正にかけて、神奈川の別荘地域が形成されていった。東京から近いので頻繁に往復して、静養し、風光を楽しみ、ある時は商談も行っていたのではないかと想像する。実業家にとって神奈川の別荘は極めて身近で日常的なものだったのではないだろうか。たとえば関東大震災の時、本書で取り上げた人物のうち2名が別荘にいたという。郷誠之助と原富太郎（三溪）である（詳細は本編参照）。

地震のおきた大正12年（1923）9月1日は土曜日であった。郷誠之助も原富太郎も日常的な休日を過ごすために別荘に来ていたのだろうか。

¶ 参考文献

『日本別荘史ノート』安島博幸、十代田朗著 すまいの図書館出版局
1991 〈Y、K〉

「町並散策ぶらりin神奈川 葉山（別荘建築見学）」神奈川県建築士
事務所協会 <http://www.j-kana.or.jp/general/stroll.html>

（参照2012-1-27）

ますだ たかし

益田 孝 (1848-1938)

三井物産初代社長、三井財閥の中心人物。号は「鈍翁^{どんのう}」。小田原の別邸・掃雲台は、政財界人をはじめ数寄者の交流の場となった。

- ◆生年：嘉永元年（1848）佐渡の地役人の家に生まれる。
- ◆神奈川との関わり：文久3年4月（1863）、益田が外国方通弁御用を務めていたアメリカ公使館が横浜居留地に移転するのに従い横浜へ。同年12月、横浜鎖港談判使節の随員となった父の家来という名目で渡欧した。明治維新後、横浜に移り住み、輸出商を始め、貿易商館にも勤める。明治6年（1873）井上馨と先収会社を設立し、副社長となる。井上政界復帰に伴い会社を解散し、明治9年（1876）三井に招かれ三井物産会社総轄（社長）に就任する。

明治39年（1906）小田原市板橋に別邸掃雲台の造営を開始する。大正3年（1914）三井物産の取締役を退いて掃雲台に移り住み、茶の湯三昧の晩年を過ごす。古美術の蒐集家、茶人としても名高く、「千利休以来の大茶人」と称された。

大正11年（1922）には益田農事株式会社を設立し、社長に就任。石垣山（小田原市早川）、中島（小田原市中町）、箱根、梅地（静岡県川根本町）、宇佐美（静岡県伊東市）などに農場を設け、農事一般及び農産物の加工販売を目的として多角的に事業を展開。また掃雲台では、果樹園菜園、鶏・牛・豚などの家畜を飼育し、試験的な栽培飼育の研究を行っていた。

- ◆没年：昭和13年（1938）90歳。墓所は東京文京区・護国寺。

もっと知りたい人のために…

『鈍翁・益田孝 上・下』白崎秀雄著 新潮社 1981 〈Y、Yかな、K〉

『益田孝天人録』松永秀夫著 新人物往来社 2005 〈Yかな〉

『益田鈍翁の記憶』小田原市郷土文化館 2008 〈Yかな〉

2番目は三井物産引退までの内容。読みやすさをとるなら3番目。

山口 仙之助 (1851-1915)

日本で初めて本格的な外国人向けのリゾートホテルを開業し、道路建設、水力発電所の設置によって、箱根の近代化を支えた。

- ◆生年：嘉永4年（1851）武蔵野国の漢方医師・大浪昌隨^{おおなみしょうずい}の五男として生まれ、万延元年（1860）横浜で遊郭を営む山口糸藏の養子となる。
- ◆神奈川との関わり：明治10年（1877）外国人専門の旅館経営を志し、神奈川県足柄郡温泉村通称宮ノ下を理想の地と定める。宮ノ下で500年続いていた藤屋旅館を買収し、同時に底倉温泉の使用権を獲得。翌明治11年、富士屋ホテルと改称して日本で初めての本格的なリゾートホテルとして開業した。

当時の箱根の道路は人力車さえ通れず、その不便さが箱根の発展を妨げていた。箱根の繁栄は道路の開通を計る以外にないと考えた仙之助は、自ら1000円を寄付して道路開削のための基金を作り、底倉村の有志と協力して、明治20年（1887）に塔ノ沢－宮ノ下間に人力車を通す有料道路を完成させた。また、明治16年（1883）の宮ノ下大火でホテルが全焼した苦い経験から、旧式灯火の火災の危険性を考えて、明治23年（1890）ホテルの裏に水力発電による発電所を設ける。その後、明治37年（1904）には早川の水利権を得て、宮ノ下水力電気合資会社を設立した。

- ◆没年：大正4年（1915）64歳。

もっと知りたい人のために…

『富士屋ホテル八十年史』 富士屋ホテル 1958 〈Yかな〉

634pあり、かなり詳しくホテルの歴史が書いてある。

『富士屋ホテル小史』 富士屋ホテル [刊年不明] 〈Yかな〉

富士屋ホテルの歴史を綴ったもので、宿泊客がフロントでもらうことができるリーフレット。

岡野 喜太郎 (1864-1965)

静岡・神奈川2県で広く営業するスルガ銀行を興す。第二次世界大戦敗戦後の神奈川県の復興資金を提供した。

- ◆生年：元治元年（1864）駿河国駿東郡青野村（現・静岡県沼津市）の名主の家に生まれる。
- ◆神奈川との関わり：地元の荒廃を憂い、明治20年（1887）貯蓄組合・共同社を発足させる。これが根方銀行、駿東実業銀行、駿河銀行と改称しつつ大きくなり、明治43年（1910）には厚木に神奈川県内で初の支店を開いた。

関東大震災直後、神奈川県下は被害が甚大だったため、銀行が軒並み休業あるいは支払猶予令をもとに支払いをしない態度をとる中で、駿河銀行は「非常時にも平常のように営業するのが銀行の使命」という岡野の言により、平塚支店を拠点に県下の支店・出張所に資金を配布、預金者への払い戻しを行った。

また、終戦直後の神奈川県は、借金だらけでどこの銀行からも融資を受けることができなかった。万策尽きた内山岩太郎県知事に仲立ちする人があり、知事みずから赴いて岡野に依頼したところ、昭和22年（1947）末に融資を受ける話が決まり、翌仕事始めから県行政が円滑にすべり出したという。

- ◆没年：明治から昭和の激動の時代を約80年の長きにわたって経営に携わり、昭和40年（1965）数え102歳で没。墓所は静岡県沼津市・妙泉寺。

もっと知りたい人のために…

『岡野喜太郎伝』 芹沢光治郎著 駿河銀行 1965 〈Y、Yかな〉

創立70周年記念に、喜太郎の孫・喜一郎が友人であった芹沢に依頼してつくったもの。とても読みやすい。

『岡野喜太郎の追想』 乾徳治編 駿河銀行 1967 〈Y、Yかな、K〉

しらいし もとじろう

白石 元治郎 (1867-1945)

日本鋼管を設立し、国の支援によらず鉄鋼業を確立させる。京浜工業地帯で製鉄造船を主体とする一大総合企業に発展させた。

★生年：慶応3年（1867）陸奥国白河在釜子村で、榊原藩の下級武士の家に生れる。後に同藩の伯父の養子となって越後高田、仙台などで育つ（旧姓前山）。

★神奈川との関わり：帝国大学法科大学英法科卒。実父母養父母の面倒をみることを考え、法学士としては珍しく、役人ではなく収入の多い実業家の道を選ぶ。渋沢栄一を義父とする教授に相談したところ、浅野総一郎の名を出され、渋沢の紹介で浅野商店に採用された。英語ができることを見込まれ、浅野商店が石油部を立ち上げると支配人に、つづいて東洋汽船の支配人となった。この間、浅野の次女・マンと結婚する。

明治45年（1912）6月、日本鋼管を設立。工場の敷地を京浜地区の埋立地（現・川崎市川崎区南渡田町）とし、大正3年（1914）に操業を開始した。健康と労資一体をモットーとし、昭和12年（1937）川崎市初の総合病院として日本鋼管病院（現・川崎市川崎区鋼管通）に設立した。

★没年：昭和20年（1945）78歳。墓所は横浜市総持寺。

もっと知りたい人のために…

『鋼管王白石元治郎』井東憲著 共盟閣 1938 〈Yかな、K〉

『日本鋼管株式会社四十年史』日本鋼管株式会社編 1952 〈Y、Yかな、K〉

『白石元治郎』鉄鋼新聞社編 工業図書出版 1967 〈Yかな、K〉

1番目は正伝。2番目は日本鋼管の戦後の発展までをたどった社史。3番目は鉄鋼新聞連載を基礎に新たな資料発見によって書き改めたもの。

野村 洋三 (1870-1965)

美術骨董品貿易のサムライ商会を横浜に起こし、ホテルニューグランド会長、横浜商工会議所会頭他を歴任した。

- ◆生年：明治3年（1870）岐阜県揖斐郡鷺村大字公郷くごうの農家に生まれる。
- ◆神奈川との関わり：若き日の洋三は米国からの帰国の船中で知り合った新渡戸稲造の勧めで鎌倉の円覚寺へ参禅し、将来への悩みと向き合った。この時の縁で明治26年（1893）円覚寺の釈宗演の通訳として3度目の渡米を果たす。

帰国後は横浜弁天通りの絹物売込商岩田茂穂の店やイギリス人経営のバンタイン商会などに勤めて商売を覚えてから、明治27年（1894）横浜市本町1丁目の角に古美術商「サムライ商会」を開店した（明治28年とする資料もある）。サムライ商会は、洋三の堪能な英語と誠実な商法が外国人客を惹きつけ発展。しかし大正12年（1923）の関東大震災で建物・美術品ともに焼失し、再興に5年近い歳月を要した。さらに、第二次世界大戦に入るとほとんど休業状態となり、昭和20年（1945）の空襲により50年の歴史に幕を下ろした。

昭和13年（1938）からホテルニューグランドの会長職に就き、戦後はホテルの一室で晩年を過ごした。マッカーサー元帥が宿舎としても使用したこのホテルに、野村は居住を許された上、元帥に目通りをして市民の困窮と総司令部の豊富な食糧の放出を直訴したとされるが、実のところは人を介して希望を伝えたものとも言われている。

社会事業家の妻・美智子（ミチとも）とともに、横浜文化賞（昭和29年）、神奈川文化賞（昭和30年）を受賞している。

- ◆没年：昭和40年（1965）3月24日、95歳。墓所は北鎌倉・東慶寺。

もっと知りたい人のために…

『野村洋三傳』白土秀次著 神奈川新聞社 1965〈Yかな、K〉

昭和28年（1963）刊行の伝記に洋三死去を受けて晩年の記述を加えた。

『英学と宣教の諸相』 小林功芳著 有隣堂 2000 〈Y、Yかな〉

英語教育史の本だが「野村洋三と横浜」のタイトルで12頁に渡って足跡を綴っている。

コラム 神奈川に眠る実業家たち〈東慶寺編〉

東慶寺はお墓巡りを前面に出している寺であるが、確かに文学者や学者、芸術家の墓碑がこれでもかというほど並んでいる。有名などころでは作家の高見順、野上弥生子、日本画家の前田青邨、仏教哲学者の鈴木大拙、倫理学者の和辻哲郎、哲学者の西田幾多郎、安倍能成と、きりがないほどである。

哲学者の西田の墓の左右には、幾多郎より共に薫陶を受けた、安倍と岩波書店創業者の**岩波茂雄**の墓が建っている。この並び方にはあるエピソードがある。西田が亡くなり、東慶寺に墓を建てた時、まだ墓地には余裕があったのだろう。安倍と岩波が話し合い、自分達の墓は先生の隣にしようということになった。岩波が「俺は先生の墓の右側にするが、お前はどうか？」と言うので、「お前が右なら俺は左しかないじゃないか！」とあきれたと安倍が書き残している。実業家の岩波らしい逸話である。

安部の墓の左隣には、横浜の山下公園前にあるホテルニューグランドの取締役や会長を歴任し、横浜商工会議所会頭も務めた**野村洋三**の墓がある。その斜め前には安宅産業の創業者である**安宅弥吉**が眠っている。大阪商工会議所の会頭や甲南女子学園の創設者でもあった。弥吉亡き後、安宅産業は破綻してしまった。安宅は鈴木大拙のパトロンの存在としても知られていたが、その大拙の墓も安宅の隣に建っている。

大拙の墓所と通路を挟んでいるのが、出光興産設立者の**出光佐三**の墓である。中国などの美術品の収集にも力を注ぎ、出光美術館を開設した。

明治・大正期に政治家・実業家として活躍した**野田卯太郎**の墓もある。三池紡績社長や東洋製麻取締役、中央新聞社社長などを歴任した。

松永 安左エ門 (1875-1971)

現在の電力体制をつくり「電力の鬼」と呼ばれた実業家。また、茶人としても名高く、「近代三茶人」「近代小田原三茶人」の一人。

- ◆生年：明治8年（1875）12月1日、長崎県で生まれる。酒造業、運送業などを営む2代目松永安左エ門の長男。名前は安左衛門と表記されることもある。『耳庵松永安左エ門 上巻』には「因みに、松永自身は自らの名をも父祖の名をも安左衛門の「衛」を「エ」と表記してゐるが、戸籍名は衛である」（白崎秀雄著 1990 p32）とある。
- ◆神奈川との関わり：東邦電力副社長を経て社長、東京電力（現在の東京電力とは別）社長、電力中央研究所理事長などを歴任。東邦電力時代は東京進出を図り、東京電燈と熾烈な競争を展開した。慶應義塾在学中に知り合った福沢桃介とは、彼が社長を務める関西電気（後の東邦電力）に副社長として迎えられるなど親交が深かった。
昭和21年（1946）に住居を小田原に移す。昭和34年（1959）小田原市板橋に、収集した古美術コレクションを一般に公開する松永記念館を開館（昭和54年に小田原市に寄付され、現在は市の郷土文化館の分館として公開されている）。
還暦を迎えて茶道に傾倒し、「耳庵」を号とした。「鈍翁」の号を持つ益田孝、「三溪」の号を持つ原富太郎とも親交があり、「鈍翁」「三溪」「耳庵」は「近代三茶人」と呼ばれた。
- ◆没年：昭和46年（1971）6月16日、95歳。墓所は埼玉県新座市の平林寺。

もっと知りたい人のために…

『松永安左エ門傳』宇佐美省吾編 東洋書館 1954 〈Y〉

『松永安左エ門の生涯（小島直記伝記文学全集7）』小島直記著
中央公論社 1987 〈Y〉

1番目は昭和29年（1954）まで、2番目は昭和45年（1970）までの略年譜の掲載あり。

こすげ たんじ

◆ 小菅 丹治・2代目 (1882-1961) ◆

小田原の呉服屋で修業を積んだあと、当時東京の五大呉服店に数えられた伊勢丹に婿入りし、経営を近代化して百貨店として発展させた。

- ◆ 生年：明治15年（1882）神奈川県足柄上郡川村字岸（現・山北町岸）の比較的富裕な地主兼自作農であった高橋家の三男・儀平として生まれる。
- ◆ 神奈川との関わり：明治22年（1889）11歳で丁稚奉公のため故郷を離れる。1年ほど近村の小さな呉服店に勤めた後、小田原の内野呉服店に移る。番頭勤めの傍ら福沢諭吉等の書を熱心に読み、生涯の基礎を積んだ。また、17歳から外商いに配属されると、女性、特に花柳界の盛んだった小田原に多くいた芸妓のお得意を増やすことを心がけ、顧客から学ぶことに努めて目を養った。

この内野呉服店は東京・神田の伊勢丹から多く呉服を仕入れていたが、ある時、仕入れで問題があり、これを伊勢丹支配人・細田半三郎（初代小菅丹治の実弟）と交渉して収めたのが28歳の一番番頭・儀平であった。このときの好印象が縁で、婿養子を探していた伊勢丹から熱望され養子に入る。恐慌や関東大震災を切り抜け、昭和5年（1930）伊勢丹を株式会社に改組。昭和8年（1933）には新宿に進出し、第二次世界大戦を挟んで百貨店として発展に導いた。

- ◆ 没年：昭和36年（1961）9月、『伊勢丹七十五年の歩み』刊行1ヵ月後に死去。79歳。墓所は東京日暮里・本行寺。

もっと知りたい人のために…

『二代小菅丹治 上・下』土屋喬雄著 伊勢丹 1969/1972

〈Y、Yかな、K〉

著者の土屋喬雄は創業者の伝記も書いており（『創業者小菅丹治』伊勢丹 1966

〈Yかな〉）、この中にも2代目に関わる記述がある。

『伊勢丹七十五年の歩み』菱山辰一著 伊勢丹 1961 〈K〉

大倉 邦彦 (1882-1971)

大倉洋紙店社長として企業活動に尽力すると共に、東西文化の融合をめざし、横浜に大倉精神文化研究所を設立した。

- ◆生年：明治15年（1882）佐賀県神埼郡生まれ。名字は江原氏、父は村長を長年務めた素封家だった。大倉洋紙に入社し、社長の養子となって大倉姓になった。

- ◆神奈川との関わり：企業活動に尽くすことは臣民の道であり、「日本精神の練磨にもなる」という独特の信念を持つ一方で、「東西精神文化の融合」を理念とし神道、儒教、仏教などの日本精神文化を深めるための研究所兼修行場として、昭和7年（1932）横浜市神奈川区太尾町（現・港北区大倉山）に私財を投じて大倉精神文化研究所を設立。初代所長になり社会への貢献をめざした。しかし、第二次世界大戦前には次第に右傾化。戦後は巣鴨拘置所に収監された。出所後の昭和27年（1952）には所長に復帰したが、資金難に苦しむ。

邦彦没後、研究所は廃屋同然になったこともあったが、昭和56年（1981）土地を横浜市へ売却し、建物も市へ寄贈して、昭和59年（1984）「横浜市大倉山記念館」となった。研究所もこの建物の中で財団法人として活動している。付属の図書館もあり、記念館ホールではクラシック音楽の演奏会が数多く開かれ、邦彦のめざした東西文化の融合は市民活動によって新たな形で受け継がれている。

- ◆没年：昭和46年（1971）死去、89歳。墓所は八王子市富士見台霊園。

もっと知りたい人のために…

『大倉邦彦傳』大倉精神文化研究所編 大倉精神文化研究所 1992
〈Y、Yかな、K〉

『大倉邦彦と精神文化研究所』大倉精神文化研究所編 大倉精神文化
研究所 2002 〈Y、Yかな、K〉

「大倉山記念館～東西文化の融合、具現化」『続首都圏名建築に逢う』

まつのぶ だいすけ

松信 大助 (1884-1953)

有隣堂創業者。関東大震災、横浜大空襲の2度に亘る被災にも負けず再興に奔走した。

- ◆生年：明治17年（1884）横浜区尾上町で、野毛通りに絵草子屋を営む大野源蔵の四男として生まれる。姓は母方の松信家を継ぐ。
- ◆神奈川との関わり：明治35年（1902）長兄が経営していた、創業が明治20年代ともいわれる「第一有隣堂」に店員として勤める。

明治42年（1909）12月13日、伊勢佐木町通りの書店跡に「第四有隣堂」と屋号を定めて独立開業した。これが現在の有隣堂の創業記念日である。関東大震災で裸一貫となるも、焼跡にバラックを建て古本を売ることから始め、新生の第一歩を踏み出す。横浜大空襲では店舗も自宅も被災するも、これを予期していた大助は本牧の倉庫に大量の商品を疎開していたので、終戦と共に伊勢佐木町店舗跡は接収されたまま、この本牧倉庫を改造し疎開商品を以て営業を開始した。

昭和16年（1941）湯河原に別荘「有隣荘」を新築。戦時中はここに疎開し、戦後はここから横浜に通い接収解除に奔走、新ビル建設の計画途中の死であった。

- ◆没年：昭和28年（1953）10月14日、69歳。墓所は横浜市日野公園墓地。

もっと知りたい人のために…

『横浜有隣堂九男二女の物語』松信八十男著 草思社 1999

〈Y、Yかな、K〉

大助の八男の筆による家族史。大助夫妻と子ども11人のそれぞれの人生が趣深い。

『有隣堂小史 創業者を偲びて』 有隣堂 1959 〈Yかな〉

創業50周年記念の16頁の小冊子。写真と文章で創業者と有隣堂の歩みを振り返る。

有隣堂には他にも次の各年史がある。

『有隣堂七十年史』1979 〈Yかな、K〉、『有隣堂八十年史』1989 〈Y、Yかな、K〉、『有隣堂100年史』2009 〈Yかな、K〉

ふじい りんえもん

藤井 林右衛門 (1885-1968)

横浜を「創業の地」として大切にしてきた洋菓子店・不二家の祖。

◆生年：明治18年（1885）愛知県愛知郡平野村（現・名古屋市の農家・岩田家に生まれる。6歳の時、藤井家に養子に入った。

◆神奈川との関わり：明治33年（1900）知人のついで、横浜で建場^{なてば}★をやっていた杉浦商店に勤める。明治40年（1907）店主の妹と結婚。義兄の勧めもあり妻と相談の上、明治43年（1910）横浜・元町に洋菓子店「不二家」を開く。大正元年（1912）視察と技術取得のため渡米し、帰国後、喫茶店を新設。大正11年（1922）に横浜・伊勢佐木町に初の支店を開店すると、横浜名物といわれたシュークリームの販売を開始。翌年の関東大震災ですべて焼失するも、菓子パンの卸から復活して再度、伊勢佐木町と銀座に店舗を建てた。

☆建場：今日でいうところの古物売買業の間屋格の店。在留外人が引き上げる際に処分する道具類を競り落として転売していた。

震災後、本店を銀座に移すが、昭和12年（1937）には伊勢佐木町店を建て替えて地下1階地上5階の店舗とし、伊勢佐木町の賑いに貢献した。戦後、この店は12年間にわたりGHQの接収を受けた。

◆没年：昭和43年（1968）死去。享年83歳。

もっと知りたい人のために…

『不二家・五十年の歩み』 不二屋 1959 〈Yかな、K〉

「洋菓子の普及に貢献した藤井林右衛門 「不二家」の創業者」草間
俊郎監修 かながわ風土記 (188) 1993 p44-50 〈Yかな〉

「横浜の風土に育まれた不二家」田中喜信[講演] 『横浜学セミナー
18 横浜の食文化2』はまぎん産業文化振興財団編集 横浜学連絡
会議 1996 p 7-28 〈Yかな〉

藤井林右衛門個人についての著作はないが、上記3点に詳しい。

のなみ もきち

野並 茂吉 (1888-1965)

崎陽軒社長。「シウマイ王」と呼ばれた。

- ◆生年：明治21年（1888）9月20日、栃木県上都賀郡加蘇村大字加園（現・鹿沼市加園）に農業渡辺富三の次男として生まれる。
- ◆神奈川との関わり：大正2年（1913）崎陽軒の名義人である久保コトの養女である小川千代と結婚。久保コトの実家で後継者がいなかった野並家を継ぐこととなった。横浜駅（現在の桜木町駅）構内の売店からスタートした崎陽軒は、大正4年（1915）匿名組合崎陽軒に改組され、その後野並が支配人に起用される。野並は大正12年（1923）同組合を解散して合名会社崎陽軒を設立、代表社員（株式会社の代表取締役にあたる）に就任した。横浜名物になるような特色ある駅弁の開発に着手、昭和3年（1928）に“冷めてもおいしいシウマイ”が誕生した。また、昭和9年（1934）横浜駅東口に中華食堂を開設し、昭和16年（1941）株式会社崎陽軒食堂として独立させた。昭和23年（1948）合名会社崎陽軒は株式会社崎陽軒食堂と合併し株式会社崎陽軒として発足、代表取締役社長に就任した。宣伝・販売に力を入れ、昭和25年（1950）には、赤い制服にシウマイ娘とかかれた襷を掛けた若い女性に駅ホームにて販売をさせる“シウマイ娘”を登場させた。

昭和11年（1936）には神奈川県議会議員に立候補、当選。昭和15

年（1940）まで一期を務めた。

◆没年：昭和40年（1965）12月6日、77歳。墓所は横浜市久保山墓地。

もっと知りたい人のために…

『シウマイ人生』野並茂吉著 朝日書院 1964 〈Yかな、K〉

自伝。昭和38年（1963）までの内容。

「100周年通史」『横浜と共に一世紀』神奈川新聞社編集・制作

崎陽軒 2008 p34-176 〈Yかな、K〉

創業100周年記念誌。当時の様子がよくわかる写真が豊富。

さかた たけお

坂田 武雄（1888－1984）

「ペチュニアのサカタ」と呼ばれた、世界有数の種苗会社サカタのタネの創業者。

◆生年：明治21年（1888）東京・四谷荒木町で文部省役人の長男として生まれる。父の転勤に伴い、幼少期を山形で過ごす。

◆神奈川との関わり：東京帝国大学卒業前に、農商務省の海外実業実修生試験に合格し、渡米して育苗・園芸を学ぶ。さらに自費でヨーロッパでも研修し、帰国後の大正2年（1913）苗木の輸出入を手がける朝日農園を横浜に設立。しかし、検疫の壁や第一次世界大戦の勃発などで行き詰まり、種子の輸出入に転向。大正5年（1916）坂田商会と改称し、昭和17年（1942）企業合同により坂田種苗株式会社（現・サカタのタネ）となる。昭和20年（1945）戦局悪化によって花卉生産が不可能になり会社を辞めてしまうが、終戦後社員に請われて復帰する。優秀な品種開発を目指して人材を登用する一方、海外との取引も再開。昭和23年（1948）本社を横浜・桐畑に移転。昭和26年（1951）には本社に売店部を併設し日本の園芸店の先駆けとなる。県内では昭和30年代に藤沢市長後、足柄上郡中井町に試験場

を開設した。

収集した美術品は、「坂田コレクション」として横浜市美術館に寄贈されている。

◆没年：昭和59年（1984）1月死去。95歳。墓所は鎌倉霊園。

もっと知りたい人のために…

『種子に生きる 坂田武雄追想録』坂田正之編 坂田種苗株式会社
1985 〈Y、Yかな、K〉

坂田武雄の文章と知人からの追悼文をまとめたもの。坂田と会社の年譜や写真なども載る。

「西のタキイ、東のサカイ」『種子のロマン 日本種苗業界の歴史
明治・大正篇』金子才十郎著 [金子才十郎] 1991 p363-401 〈K〉

副題どおり、日本種苗業界の歴史が読みやすく書かれている。オススメ。

「「サカタのタネ」という会社」『世界に夢をまく「サカタのタネ」』
鶴蒔靖夫著 I N通信社 1991 p184-236 〈Y、K〉

コラム 神奈川に眠る実業家たち

東京には谷中霊園、青山霊園、雑司ヶ谷霊園、多磨霊園などなど、広大な公園墓地が存在する。東京を舞台として活躍してきた多くの実業家たちもまた、その型破りな人生を象徴するかのような広い墓域を誇りながら、霊園にその位置を占めている。谷中には渋沢栄一が、青山には御木本幸吉が、多磨には石橋正二郎がといった具合である。（なお、郷里に分骨されている人もいる。）

では神奈川は、というと、古都鎌倉の、東京とは違った落ち着いた雰囲気にかき立てられるのか、文学者や学者に限らず、実業家も墓所を定めている。

まずは北鎌倉から歩いてみよう。横須賀線をはさんで円覚寺と東慶寺（〈東慶寺編〉参照）が向かい合っているが、円覚寺には、読売新聞を大新聞社にのし上げた「企画の天才」と呼ばれた**正力松太郎**の墓がある。

もう30年近く前の事であるが、円覚寺の山門前の石段を登ってきた長嶋茂雄氏とすれ違ったことがある。第1期の巨人軍監督を終え、再度監督に就任する間の時であった。どうしたのだろうかと思ったが、すぐに合点があった。正力は読売巨人軍のオーナーでもあったのだから、墓参に来たのは明らかだった。心境の報告にでも来たのだろう、まもなく長嶋氏は監督に復帰した。同じ墓地内には、映画監督の小津安二郎や木下恵介、作家の中里恒子の墓もある。

鎌倉駅から東に5分ほど歩いた大町に、比企一族の終焉の地として知られる日蓮宗の妙本寺がある。ここには「丹下左膳」を書き、3つのペンネームを使い分けたことでも知られる作家・長谷川海太郎の墓があるが、本堂を挟んだ墓域には横濱文明堂の創業家である**平川家**の墓所がある。妙本寺からほど近い、安国論寺には東芝社長や経済団体連合会会長などを歴任した**土光敏夫**の墓所がある。

鎌倉にも実は公園墓地がある。西武グループが開発した鎌倉霊園である。川端康成や山本周五郎、画家の宮本三郎、谷内六郎などの墓所もあるが、一番見晴らしの良い場所には、西武鉄道などを創設し、西武グループの基礎を築いた**堤康次郎**の墓所が他を圧倒している。

鎌倉以外の地では、横浜市鶴見区にある曹洞宗総本山の総持寺に、セメント王と呼ばれた**浅野総一郎**、三井銀行の常務取締役や南満州鉄道社長などを歴任した**早川千吉郎**らが眠っている。また、葉山町の光徳寺には「味の素」を開発し、味の素の前身である鈴木商會を設立した、**鈴木三郎助・忠治**兄弟の墓所もある。

ここでは全国レベルで活動した人物を取り上げたが、神奈川を中心に事業を展開した実業家の多くも、当然県内に眠っている。本書「別編」や『神奈川有名人のお墓参り』（樋渡佑典 2009）なども参照されたい。